

GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

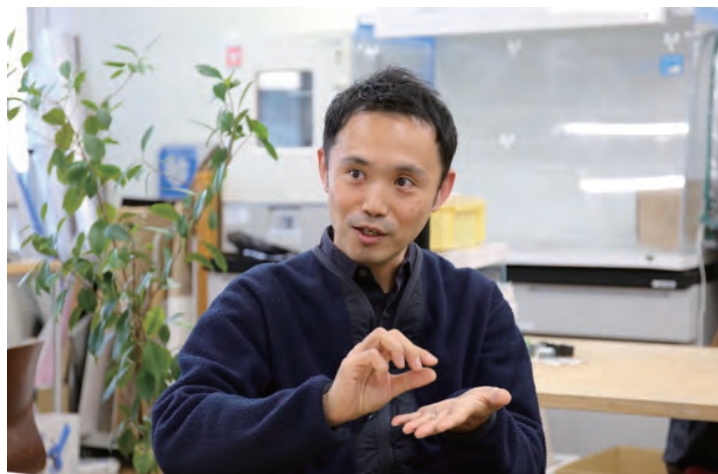


No. 64

2025 SPRING

工学・アート・デザインの絡まりで 新しい経験を生み出すラボ

笥 康明 教授



——先生の現在に至るまでの経緯を教えてください

もともと僕は、学部は本学の工学部電子情報工学科出身です。そこで最初は、仮想空間や、拡張現実など情報工学の研究に取り組んでいました。

ただ、没入型の空間に入ってバーチャル空間を体験するような世界は、僕としてはあまり好きではなかったの、やがて、プロジェクション技術を使って物理世界に映像を重ねていくような映像装置の研究にシフトしていきました。ちょうどその頃、学環学府が立ち上がります。アートの研究が出来る大学院を始めるということで、苗村健先生の研究室に入りました。自分の研究を表現や応用に近いところで実践したいという思いがあり、そこでメディアアーティストやデザイナーの人たちと出会って、徐々に、アートとデザイン、アートサイエンスという世界に足を踏み入れます。

その後、慶応義塾大学のSFCやMITのメディアラボなどを経て、2018年にこちらに着任しました。

——現在のお取り組みについて教えてください

立ち上げ当初、このラボのテーマのひとつを、マテリアルエクスペリエンスデザインと据えました。つまり、光学的アプローチによる視覚情報を扱うだけでなく、マテリアルの機能性を応用して、実体を有し五感に訴える体験の出来るインターフェイスを作る試みです。

マテリアルから、変化や応答性、インタラクティブと呼ばれるものを設計することができないか。そこで、一つは機能性のある材料の研究をしていて、それは刺激を与えると色が変わったりとか形が変わったりとか大きさが変わったり、光ったり音が鳴ったり、いろんな振る舞いをするマテリアルを作ることです。既存のものや自然のものを含めてそういった素材を、うまく活用することによって、マテリアルからインターフェイスを作っていくことをやっています。これまでのフラットなモニターだけでなく、文字通り物理的に形が形成されるようなインターフェイスの研究をしています。それは、モノづくりのプロセスをサポートしたり、新しい情報表現のあり方や環境とのつながり方を示す技術となる可能性を秘めています。

——先生の研究室の学生さんたちは、実に様々なジャンルの研究に取り組まれています。皆さんそれぞれが、様々なテーマを持ち込んで、研究室に集まって来られるのでしょうか？

ラボとして、プロジェクト的に進めているものがあって、希望があればそこに参加してもらおうということもありますし、自分でやりたいテーマを持ってきて、それをラボで何かしら形にすべく、実践している人もいます。でも、せっかく大学のラボという中で活動するのですから、家で一人で出来てしまうような事に取り組むよりも、できるだけ周りの、自分とは少し異なることをしている人とか考えている人とコラボレーションするようにした方が面白いよ、という話は良くしています。最終的には修士論文や博士論文で、責任を持つという事は必要ですが、その過程においてはさまざまな人とコラボレーションができるようにと思っています。

今は、学生の半分ぐらいは美大や藝大から、残りの半分は、工学的、科学的な分野から来ています。その中には画家、工芸家、建築家の人もしれば、デザインの仕事をしている人もいます。工学の方面では、機械工学、電気工学、材料工学。いろんな人がここに来たら何かちょっと違う新しいことができるだろうという期待感のもとにきています。みんなの関心をみんなで議論して育てていくようなことをやっているので、これは学際的の極みとも言える面白い状況です。国籍、年齢層も多様になってきていて、すでにプロとして活躍している人も、ここに来ています。一方的に僕が何かを教えるという関係ではなく、それこそお互いに学び合うそういう場所になってきているという感じがですね。

——研究室のいろんな学生さんをご指導される上で、大切にされていることはありますか。

一つはやはり対話です。一緒になってアイデアから作っていくということをやっているの、対話はすごく大事です。学生同士の横の繋がりはもちろんそうだし、僕自身が、作るということを傍でずっとやり続けることは結構大事だと思っています。フィードバックの壁としての存在だけでなく、一緒になって作る、考えることを大事にしています。こういう領域は、僕自身まだ見たことのないものをどうやって作っていくかという事なので。僕だけが答えを知っていて、みんなが知らないことを教えてあげるといってはいけません。時には同じ方向を向いて走っていかないといけないし、時には向かい合って話し合うことが必要で、その視点の置き方が、腕の見せどころなんだと思います。先生として、そして共に未知なテーマに挑むコラボレーターとしてですね。

情報学環・学際情報学府、新しいロゴを発表 — 学環・学府の二つの「渦」の重なりで表現

2024年10月19日(土)に実施されたホームカミングデイにおいて、東京大学大学院 情報学環・学際情報学府は、新たなロゴを発表しました。このロゴは、学際的な知識と情報の融合を象徴するデザインとして制作され、情報と知の多層的な構造を視覚的に表現しています。

発表された新しいロゴのシンボルマークは、二つの渦が重なり合い、中心から外へと広がっていくデザインが特徴です。このデザインは、学環・学府の20周年ロゴも担当した伊達亘氏(グラフィックデザイナー/長岡造形大学助教/元・情報学環特任研究員)によって手がけられました。ロゴに描かれた渦は、研究組織としての「情報学環」と教育組織としての「学際情報学府」を象徴しており、それぞれの歴史と未来の交差を表現しています。

また、渦の形は必ずしも綺麗な円を描くのではなく、揺れ動きながらもユニークな環を成しています。これは、さまざまなチャレンジや新たな出会いを通じて、情報学環と学際情報学府が形成されてきた過程を象徴しており、多岐にわたる学問領域の交わりや、国際的な研究・教育の場としてのイメージをも重ね合わせることができます。

記事: 情報学環・学際情報学府PR-IR委員会



ホームカミングデイ2024

2024年10月19日(土)情報学環・福武ホールにて、情報学環ホームカミングデーが開催されました。本年度は本格的な対面開催のイベントとなり、ほぼ満席の賑わいとなりました。

2024年度のテーマは、「デザインの実践と学術研究の境界」でした。渡邊英徳教授の挨拶の後、両者がどのように相互作用し、影響を与え合うのかについて、学環・学府にゆかりのある阿部卓也氏(愛知淑徳大学准教授)、伊達亘氏(グラフィックデザイナー/長岡造形大学助教)、Dea Bankova氏(Reutersデータサイエンティスト)、齋藤帆奈氏(現代美術作家/博士課程)と、澁谷遊野准教授、寛康明教授、渡邊英徳教授によるパネルディスカッションが行なわれました。

デザインの実践はしばしば現場での直感的な創造を伴い、一方で学術研究は理論的な枠組みや分析を重視しています。この二つのアプローチが交差することで生まれる新たな知見や、学問的な視点が実践に、あるいは逆方向に与える影響を議論し、デザインの未来について考える場となりました。

記事: 原田真喜子(特任助教)



2024日韓台シンポジウム “Human AI Communication”

2024年10月17日(木)、台湾国立政治大学(NCCU)キャンパスにて、日韓台シンポジウムが開催されました。東京大学大学院情報学環・学際情報学府、ソウル大学校社会科学大学言論情報学科、国立政治大学伝播学院から教員と学生が集い、「Human AI Communication」をテーマに議論を深めました。シンポジウムの開催地は山々に囲まれた美しい景色に恵まれ、人工知能(AI)と人間と複雑な関係について考える場となりました。

シンポジウムでは、AIがコミュニケーション、生産性、透明性、社会的責任にどのような影響を与えるかについて、教員と学生によるプレゼンテーションが行われました。また、翌日のフィールドトリップでは台湾のAR(拡張現実)テック企業Speed 3Dを訪問し、AIがもたらす技術革新について理解を深めました。

記事: Priya Mu(博士課程)

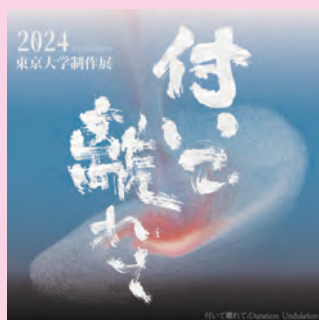


東京大学制作展2024「付いて離れて」

2024年11月7日(木)から11日(月)にかけて、「東京大学制作展2024 付いて離れて」を開催しました。東京大学制作展は、情報・メディアアート分野を専門とする教員達の監修のもと、学際情報学府の学生を中心に、多様なバックグラウンドを持つメンバーたちが作り上げる展覧会です。大学生活の中で得た学びや気づきを「作品」として様々な形で表現し、作品制作に加えて企画から運営まで、すべて学生が主体となって行っております。

本年は過去最大級の37作品が出展され、本郷キャンパス内の全4会場に作品が並びました。来場者数も過去最多を記録し、のべ2600人以上の方々にご来場いただきました。ご協力いただいたすべての方々にご来場くださった皆様に、参加者一同深く感謝を申し上げます。

記事: 都築あい(修士課程)





デジタルファブリケーションとメディア (メディアテクノロジーシリーズ 6)

三谷 純(編) 田中浩也/小山裕己/寛 康明/五十嵐悠紀(著)
出版年月:2024年4月 出版社:コロナ社

デジタルファブリケーションが普及する中、本書はその思想や手法、展望を4名の著者がまとめたものです。私は第3章「インタラクティブなものづくり」を執筆し、コンピュータを介して対話的、即興的なものづくりを支援する手法や、センサやアクチュエータ機能を統合し動的に形や色などを変化させる新たなものやその製造手法を紹介しました。(寛 康明教授)



「未来の学び」をデザインする新版

美馬のゆり/山内祐平(著)
発行年月:2024年9月 出版社:東京大学出版会

プロジェクト学習やワークショップ、ラーニングコモンズやアクティブラーニングスタジオなどの新しい学習空間の背景にある学習理論と学習環境のデザインについて、2005年に発行した初版を改稿し、その後の展開についてはこだて未来大学教授美馬のゆりさんとの対談を収録して新装復刊しました。ぜひ手にとってご覧ください。(山内祐平教授)



オタク文化とフェミニズム

田中東子(著)
発行年月:2024年9月 出版社:青土社

『ユリイカ』と『現代思想』に掲載した論稿を中心にまとめなおした1冊になります。昨今のメディア企業とジェンダー、フェミニズムの問題、オタク文化と女性たち、メディア文化の商品化や経済偏重化をめぐる諸問題について、「推し活」「情動労働」「情熱のカツアゲ」「ルッキズム」などの言葉を切り口に論じています。気軽に読める本なので、ぜひお手にとってください。(田中東子教授)



日本の分断はどこにあるのか スマートニュース・メディア価値観全国調査から検証する

池田謙一/前田幸男/山脇岳志(編著)
発行年月:2024年10月 出版社:勁草書房

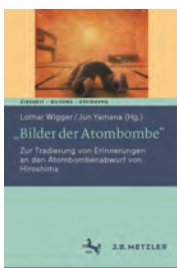
スマートニュースメディア研究所との共同研究の成果です。PewResearchの調査がアメリカの社会的分断を鮮やかに示していることに触発され、日本における分断を探る調査を実施しました。伝統メディアとソーシャルメディアの役割に注目しつつ、イデオロギー、政治との距離等の5つの視点からデータの分析を行っています。(前田幸男教授)



身のまわりの仕組みがわかる 物理について 大島まり先生に聞いてみた

大島まり(監修)
発行年月:2024年11月 出版社:Gakken

身近にある小さな疑問、「物理」を通して理解を深めてみませんか。私たちのまわりの自然現象や、日々にげなく使っている製品の仕組みを取り上げて、高校物理を基本に「物理」をわかりやく解説しています。手にとってページをめくってみてください。わかりにくかった「物理」が「なるほど!」に変わるかもしれません。(大島まり教授)



“Bilder der Atombombe” Zur Tradierung von Erinnerungen an den Atombombenabwurf von Hiroshima

ローター・ヴィガー/山名 淳(編著)
発行年月:2024年12月 出版社:J. B. Metzler

被爆証言者との対話を通して高校生が描く広島「原爆の絵」プロジェクトについて、ドイツ語圏の研究者たちと共同研究を行いました。本書はその成果です。「感性(美性)」や「当事者」などを鍵概念として用いつつ、「痛み(悼み)」が伝わるとはどのようなことか、「何をどこまで表象してよいか」といった想起文化の根本問題にも取り組みました。(山名 淳教授)



大庭幸治
教授

大学時代に、人の健康を維持・向上するうえで統計学が果たす重要な役割に気づき、それ以来、統計学の方法論の研究や、統計学を活用した共同研究に取り組んできました。

2026年4月からは、生物統計情報学コースで博士課程がスタートします。これを機に、多くの学生の皆さんとともに、情報学環・学際情報学府をさらに発展させ、学びの場をより充実したものにしていきたいと考えています。



三宅弘恵
教授

地震研究所から参りました。専門は強震動地震学や災害科学です。前回の流動では、人も分野も全て新しく、多くのことを学びました。学環でなされていた議論が、年月を経て世の話題になることが多く、学環は組織形態のみならず学術内容も時代の先取りをしていると感じます。この度、有難く再流動の機会をいただき、心新たに望みたいと思います。



植原 亮
准教授

科学技術と社会・人間に関する学際的研究をテーマにしています。科学哲学から出発して脳神経倫理学や科学的思考などにも研究を広げ、その成果を広義の科学コミュニケーションの実践として一般向けにも届けるように努めています。情報学環では、科学の文化としての側面や人間にとっての意味を中心に、いっそう幅広く実り豊かな研究を目指します。



堀川康史
准教授

史料編纂所から流動教員として参りました。専門は歴史学(日本中世史)で、鎌倉時代の史料集出版を担当するかたわら、14世紀の南北朝内乱に関する研究に取り組んでいます。わたし自身は何の変哲もない、伝統的な文献史学者といったところですが、学環の教員・院生の皆さんとの分野を越えた交流を通じて、研究・関心の幅を広げていきたいと思っています。



CONGRATULATIONS

令和6年度 大学院学際情報学府 秋季学位記伝達式

2024年9月20日(金)、学際情報学府の秋季学位記伝達式が福武ラーニングシアターで開催されました。3月にあった令和5年度の学位記伝達式に続き、秋季学位記伝達式としてはコロナ禍以降初めてとなる対面のみでの実施となりました。修士課程10名と博士課程6名の16名に学位記が伝達されました。その後、目黒公郎学府長より祝辞が贈られました。

記事:柳 志旻(博士課程・編集部)

令和6年度 秋季入学式・ガイダンス

2024年9月27日(金)、学際情報学府の秋季入学式および入学ガイダンスが福武ラーニングシアターで対面で開催されました。修士課程12名と博士課程2名の14名の学生に、目黒公郎学府長と苗村健専攻長より祝辞が贈られました。山川雄司学生・留学生委員長からのメッセージも読み上げられました。

記事:柳 志旻(博士課程・編集部)



学位記受け取り代表者の
安藤元博さん(博士・右)
須賀友花さん(修士・左)



令和6年度秋季学位伝達式の様子

修士課程合格者数(冬季募集)	
社会情報学コース	10名
文化・人間情報学コース	11名
先端表現情報学コース	5名
総合分析情報学コース	10名
合計	36名

博士課程合格者数(夏季・冬季募集)	
社会情報学コース	7名
文化・人間情報学コース	6名
先端表現情報学コース(※)	16名
総合分析情報学コース	2名
合計	31名

※先端表現情報学コースは博士課程合格者数16名のうち夏季募集の最終合格者数6名

<https://www.iii.u-tokyo.ac.jp>

【あとがき】

何らかの式典で、ひとしきり話をした登壇者が「・・・というのはChatGPTが生成した内容でした。」と、ひと笑いをとる光景に何度か遭遇しました。どんな新技術もはじめは、好奇か、あるいは「計算機を使ったら馬鹿になる」「メールでは心が伝わらない」などと、忌避か、その両極端で語られがちです。ただいずれ、社会はその技術を、空気や水のように当然存在するものとして回り始めます。どこまでを人間が生成し、どこからがそうではないのか。学環・学府の新しいロゴの、揺れ動き際を変化させていく渦は、この四半世紀の人と情報の境目の変化を表しているようにも見えます。あなたはそこに何を見出しますか？（開沼 博）

GAKKAN 64 2025.04

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

編集委員：開沼 博、畑田裕二、原田真喜子、山内隆治、柳 志岐